

論点整理 施設計画

1 基本構想より

第2章 2-4.あたらしい多摩市立図書館全体への提言

(2) 全体の図書館運営に関わる3要素のマネジメント

○ 施設・環境の配置と役割再編と管理について：

- ・ 中央図書館の施設環境に求められることは3章で述べています。
- ・ 分館の地域館や駅前拠点館についても、本館整備に合わせて、順次見直しや充実が必要になるかもしれません。本棚の配置を工夫してサービスデスクに近接させ中心区域として、読書席やブラウジングなど人の居場所を拡大し、滞在型に充実させてゆきたいところです。

第3章 3-1.中央図書館整備の「使命」そしてあらたに

(2) 中央図書館は、資料を提供する役割に留まらずに、市民の多様な活動の場、出会いの場を提供します。「都市の広場」、多様な世代の「居場所」となります。

- ① 子どもたちにとっての「喜びのひろば」
- ② ティーンズにとっての「たまり場」
- ③ おとなにとっての「知の広場」

第3章 3-2.基本的図書館サービスの深化と高度に専門化された新しいサービス

《施設関連項目を抜粋》

(1) 「専門性が深化し充実した基本的図書館サービス」

- ・ 資料規模は大きく、できるだけ開架展示を。公開書庫方式も研究したい。
- ・ 音声映像のCD、DVDなどを、主題別に混配し構築したい。
- ・ ICチップを資料管理に加えて、混配表現導入を研究したい。

(2) 「多様な市民と活動を支えるサービスと場の提供」

- ・ 施設のバリアフリー対応は、新しい法律に準拠をしてゆく。
- ・ 催事企画もコミュニケーションサービスとして重視したい。
- ・ 展示やカフェなどの交流機能を、施設計画時に検討したい。市民やグループが自由に使える集会や展示の場を造りたい。
- ・ 自由な集会機能、ラーニングコモンズ、ボランティア活動室など図書館を舞台にした市民活動の場を、複合的に計画。

(5) 「時代が求める高度で専門化された図書館サービス」

- ・ 館内にWi-Fi、電源などを整備して、PCの利用環境を整備する。

第3章 3-4.市民協働で「もの」と「こと」のデザインを

② どんな施設環境をつくるのか

場の計画の前提として、そこで想定されている活動や、はたすべき機能の量や質の概要を想定する必要があります。図書館施設計画の領分であり、もののデザインです。活動と施設は相関関係があって、施設の不備は活動やその将来の成長を制約して、施設の寿命を短くもします。

ことは、ものより先に考えるべきです。他方、魅力的な環境は想像以上に活動を誘発し成長させることもあります。「こと」（出会いや発見や学びや喜び）のデザインは、容れ物である場とともに想像することで、創造的に膨らみます。例えば図書館では、いかに少人数で開架室を運営できるか、それが可能な施設かが、ランニングコストやライフサイクルコストのマネジメントに大きく関係します。経営に叶うことも必要です。

第4章 4-4.機能的／快適／魅力的／経済的な施設づくり

《抜粋》

- ① 機能的であること
 - ・ 基本計画で緻密な方針を与える条件プログラムを準備
 - ・ 建築は大切だが目的ではない
- ② 快適であること
 - ・ 静かさを求める人、賑わい出会いを求める人、それぞれの行為にふさわしい快適さ
 - ・ 本の居心地、出会うべき人との舞台場面
 - ・ 地球環境にやさしい建築、CO₂の排出を少なく、自然の気候を活用する工夫
- ③ 魅力的であること
 - ・ 利用者をまた来たいと思わせる魅力
 - ・ 広場的な共用部、集会や展示機能、フリースペースをわかりやすく魅力的に
- ④ 経済的であること
 - ・ 拡張性や可変性を織り込んだ施設
 - ・ 建設と運用と修繕のトータルなライフサイクルコストへの配慮

2 施設計画検討課題

(1) 面積配分等について

- 現在の本館の延床面積は、5,480 m²である。
- 今回の資料では、建築基準法上の延床面積ではなく、建築計画の視点で、建築物室内の面積で5,400 m²を目安として、各機能に必要と考えられる面積については、積み上げの目安の一例として示している。この収容規模で、完成時に建築基準法上の延べ床面積を考えると、閉架書庫は2層となり、上層も面積に参入されるため、5,400 m²+420 m²+その他建物外の読書テラス等となり、5,820 m²以上の施設規模となる。(p.3-16)
- 最近の新たな図書館に併設されているような、ある程度の規模のホール機能や、乳幼児を預かる機能などについては、パルテノン多摩側で用意される小ホール、オープンスタジオ、地域子育て支援拠点事業などによることとし、図書館には設けない。
- 以上のような前提をご理解いただき、これまでに議論してきたサービス、資料、運営などで必要とされる機能が盛り込まれているか、それぞれの機能を持たせた部門がどのように隣接・融合することが必要なのか等について、以下のような視点も含めてご検討いただきたい。

(2) 開架資料のエリアについて（開架書庫、広場系、静寂系）

- これまで多摩市立図書館では、利用者用の開架資料スペースを、大きくは一般と児童（さらにティーンズなど）に分け、さらに新聞、雑誌コーナーなどを区分してきた。
- 浦安市などでは、開架と閉架書庫との中間的な、開架書庫ともいえる位置づけの区画を設けている。目的は様々考えられるが、開架のラインナップを維持し、開架と閉架の調整池的な役割を持たせることが考えられる。
- 一方で、開架、開架書庫、閉架書庫をうまく使い分けるためには、職員間や利用者との間で配架の方針を共有する必要がある。また、実際にそれぞれの棚を維持していくことにはかなりの労力を要し、この開架の蔵書規模であれば、レファレンスなどの際には分散しすぎていることの弊害があるのではないかと考えられる。今回のたたき台では、開架書庫は設けない形で提案している。
- また、開架資料区画の分け方を、一人で静かに読む利用の仕方と、親子や友人と会話しながら本を選ぶような利用の仕方を想定し、「広場系」と「静寂系」に分けて提案している。
- 以上のような、利用者が資料に直接アクセスできる区画の分け方とその中に配置すべき資料の種類について、前回提示した飲食の可否などについて意見を伺う。

(3) 利用者のためのスペースについて（広場系、静寂系、市民活動支援部門）

- 利用者の居場所となるスペースについては、開架資料のエリア（広場系、静寂系）のほか、集会や展示のできるスペースなどが考えられる。
- これまで多摩市立図書館では、調べ物のできるような多人数掛けの机と椅子、書架の合間でブラウジングしながら本を手にとって座れる椅子の設置、児童書のコーナーに寝転がって絵本が読めるカーペットなどを設けてきた。その他、関戸図書館で初めて「閲覧室（59席、112㎡）」と「活動室（小規模の集会室、77㎡）」を設置し、現本館でも「閲覧室（49席、135㎡）」と「講座室（68㎡）」のほかに、パソコンを持込んで利用できる「学習室（45席、102㎡）」、ボランティア活動等に利用できる「活動室（68㎡）」などを設置してきている。
- 他方、多摩市内には、大小のホールを持つパルテノン多摩をはじめ、ホールと講座室等を持つ駅前の2つの公民館、小規模なホール等を擁する9箇所のコミュニティセンター、会議室のあるコミュニティ会館と3箇所の地区市民ホールなど、集会機能を持つ公共施設は多く存在する。
- 最近の図書館では、武蔵野プレイスや塩尻市の事例などに代表されるように、図書館に溶け込むように市民活動のスペースを置き、最近大学等で取り組まれているようなラーニングコモンズやグループ学習、多世代交流の生じるスペースなどを置くことで、本来の図書館機能に必要な「ひろば」で学ぶ機能を発揮する事例が見られる。
- 多摩市の新たな本館について、このような人の集えるスペースについての必要性、開架スペースとは別にフロアや区画をしっかりと区切ることが必要か、または書架のあるスペースと溶け込むなかでラーニングコモンズやグループ学習ができるような設えの良し悪しなどについて、パルテノン多摩との役割分担の視点も含めて、検討いただきたい。

(4) 閲覧席・学習席について

- 多摩市立図書館では、関戸図書館で「閲覧室（59席）」を設け、現在の本館では「閲覧室（49席）」と「学習室（45席）」を設けるなど、読書やノートパソコンを併用した学習などを支援する施設を整備してきた。
- 最近の図書館では、「ゆいの森（800席）」「大和市シリウス（800席）」など、閲覧席等を充実する図書館の事例が見られる。また、図書館以外の市内の様々な施設では、夜遅くまで机に向かう高校生等の姿も見られる。
- 図書館界では、かつて資料が利用されず席の利用が中心で「勉強部屋」でしかない図書館から、貸出や児童サービスなど、「貸出」という資料の利用を中心にすえた図書館サービスへの転換があり、その延長線上にレファレンスがあるという方向で活動してきた。しかしさらに最近になって、若者やサラリーマンなどのニーズをとらえ、学習席の充実、場合によっては有料でパソコン利用等の面でも充実した席の提供など、ビジネス支援環境のひとつとも考えられ、若者や現役世代にとってある種の「サードプレイス」の提供ともいえるようなサービスも展開されている事例がある。
- 新たな本館では、読書席、調べ物席等について、従来からあるような書架の間のスツール、ゆったりとしたソファのほか、カウンターのように個々が座れる席、隔離され静かな閲覧室、グループで話し合いながら使える学習室など、どのような種類の席をどの程度確保すべきかについて検討いただきたい。

(5) 駅前拠点館や地域館の役割に応じたレイアウト変更等の方向性

- 基本構想では、図書館サービス全体のあり方を見直す中で、ネットワークとしての図書館サービスの重要性と、分館も含む役割の見直しについて提言している。
- 今回の基本計画では、あくまで新たな本館の施設計画が中心となるが、駅前拠点館や地域館との役割分担を考える中では、必ずしも全てのサービスを新本館に持たせるのではなく、駅前拠点館ならではのサービスなども考えられる。
- そのような視点から、今後必要性の高まるサービスの方向性を見る中で、駅前拠点館や地域館の施設について、見直しが必要であれば、その方向性について伺う。